

## 引き際のランスロット —英雄の最後に求められたもの—

秋山直美

### 序

ランスロットは、ある意味で特異な英雄と言えるのではないだろうか。アーサー王物語群に最も頻繁に登場する人物の一人であり、円卓の騎士団の中で最も誉れ高い騎士であるが、その最後の場面を見ると、他の英雄\*の最後といくぶん趣を異にするように感じられる。英国ではともかく、少なくともフランスでは、ランスロットは文学史上屈指の英雄といってよい人物である。その偉大な英雄の最後に、「英雄の最後」としては特異と思われる点が見受けられるのである。無論、「英雄の最後」とはどのようなものか、という問題も起こってくるが、この点も検討しながら「英雄ランスロットの最後」について考察してみたい。

ランスロットは、12世紀半頃にクレチアン・ド・トロワ Chrétien de Troyes が著した『荷車の騎士、あるいはランスロ』[*Le Chevalier de la charrete ou Lancelot*]によって、以後の栄光を約束された騎士となる。クレチアンよりも少し早く、ウルリッヒ・フォン・ツァツィクホーヴェン Ulrich von Zatzikhoven が『ランツェレット』[*Lanzelet*]を書いているし、R. S. ルーミスなどによると、ケルト神話の中にそのモデルとなる人物がいるようである。だが、これらはいずれも未成熟なランスロット像、あるいは全く別の英雄像と言ってよく、その後確立されていくランスロット像への影響はほとんど無いと思われる。その意味でランスロットの起源はクレチアンにあり、『ランスロ』によって運命を与えられた騎士であるといえよう。

クレチアンがランスロットに与えた英雄像は、当時フランスで流行し始めていた「純愛(*fin'amors*)」、後に「宮廷風恋愛」と呼ばれる恋愛の、理想的恋人としての騎士像であった。これはクレチアン自身のというよりは、擁護者であったマリー・ド・シャンパーニュの意向によるものだった。結果的にこの「理想的宮廷風恋愛人」が、その後描かれるランスロットの姿を決定づけること

となったのである。この「理想的恋人」としての性質ゆえに、ラーンスロットは“not interesting as a ‘character’, that is, as an individual personality”<sup>1</sup>であり“primarily the type, the example, representative in its very extremity, of the good knight”<sup>2</sup>である。そしてそれは、「宮廷風恋愛」文学の発展と共に、顕著なものになっていくのである。

「宮廷風恋愛」の熱狂は、12世紀末～13世紀前半にピークを迎える。アーサー王ロマンスもその最盛期を迎え、「フランス流布本」[the Vulgate Cycle] (1215-35) と呼ばれる壮大な物語群として集大成されるが、この時期に（文献としては）初めて「ラーンスロットの最後」の物語が登場してくる。「フランス流布本」は「ラーンスロット物語」といっても過言ではない程、ラーンスロット中心のロマンス群であり、その誕生から成長の過程、栄誉の獲得などの描写も細にわたっている。まるでラーンスロット一代記のような、この散文物語群の性格を考えれば、その英雄の最後の物語が書かれるのも当然のことであろう。

「フランス流布本」にラーンスロットの最後の物語が登場してから百数十年後、イギリスでスタンザ形式の『アーサーの死』[stanzaic *Le Morte Arthur*] が書かれた。円卓の崩壊からアーサー王の死までを描いたこの作品の中で、ラーンスロットの最後は「流布本」とは少し違った形をとっている。そしてそれから更に1世紀を経て、マロリーが英語によるアーサー王の散文物語作品を完成させ、アーサー王文学は一応の完結をみる。勿論、ラーンスロットの最後も描かれており、文学的な質も高いものになっていると思われる。

「フランス流布本」、スタンザ形式の『アーサーの死』、そしてマロリーによる「アーサー王物語」。これらの3作品に「ラーンスロットの最後」が描かれているわけであるが、これらはそれぞれ少しずつ違った特徴を持っており、ラーンスロットという英雄を見る上で、興味深い問題を提示していると思われる。そこで、3作品それぞれの「ラーンスロットの最後」について考察し、また比較検討することによって、この偉大な英雄の最後の物語から見えてくるものを探ってみたい。

先にも述べたが、ランスロットはフランスにおいて、宮廷風恋愛文学の頂点に位置する英雄である。円卓の騎士団はアーサー王の指揮下にあり、ランスロットが活躍するのはアーサー王国であり、文学的分類においてさえ、ランスロットが属するのはアーサー王文学なのだが、12～13世紀のフランスアーサー王ロマンスでは、アーサー王は影でしかない。存在感が薄れただけではなく、その人物描写においても品格が落ち、卑俗な王になっていて、騎士の中の騎士であるランスロットの栄光と見事なまでの対照をなしている。「流布本」の後半部分にはそれが顕著に現れており、特にアーサー王の死の場面以降、両者の格差は決定的なものとなっている。

モードレットとの最後の戦いでアーサー王は傷つき、有名な死の場面となるのだが、「流布本」では、一人残った騎士ギフレ Gifflet に命令と共に剣エクスカリバーを託す際、こう言うのである。「湖のランスロット以外の何人もお前（エクスカリバー）を持つに値しない。」*"Si mait diex tu ne le pues trouver se tu ne chies es mains lancelet del lac."*<sup>3</sup> これは「流布本」にだけ見られるもので、スタンザ形式やマロリーの作品には勿論、他の主だった文献にも無い特徴である。またこの場面でアーサー王がこういった言葉を吐く必要性も無く、ただランスロットの偉大さを強調するためだけに、わざわざ加えられたのではないかと思える節がある。つまり、神秘の剣エクスカリバーの唯一の持ち主であるアーサー王に、その保持者たり得ると認めさせることで、ランスロットがアーサー王に匹敵する、あるいは王をも凌駕する、名実共に最高の英雄であると明言しているのである。

それを裏付けるかのように、その後物語はランスロットの独壇場と化していく。モードレッドの謀反によって起きた最後の戦いは、本来、双方の総大将であるアーサー王とモードレッドの死によって、終結へと向かうのが自然である。ところが「流布本」においては、ランスロット抜きで始まったこの戦いは、そのまま終わってしまうわけにはいかなかったようである。モードレッドが死に、アーサー王も斃れたというのに、モードレッドの息子達に率いられた残党によって戦は続けられる。王の軍勢はもはや壊滅状態で、反撃する力もない。そこへ颯爽と登場するのが一足遅れた英雄、ランスロットである。彼の

率いる軍勢の勢いは恐ろしいほどで、瞬く間に反乱勢を圧倒し、戦を終結させる。ラーンスロット自身も大いに活躍し、モードレッドの息子の片方を倒す。主君の仇を討ち、王国を敵から守り抜くのである。ここでラーンスロットは理想的な宮廷風恋愛人ではなく、武勇に秀でた雄々しい英雄として描かれている。言ってみれば、彼が最後に一花咲かせる場面なのである。

興味深いのは、この戦の日、ラーンスロットはグウィネヴィア王妃死去の知らせを受けるのだが、その場面の描写がいささか素っ気ない。

Car le ior misme que la baltaille dut estre li furent les noueles dites  
que la roine sa dame estoit morte & trespasse de cest siecle tiers ior  
auoit . Et tot ensi estoit il auenu comme len li auoit dit . Car [la roine  
estoit lors trespassee nouuielment . Mais] onques mais si haute dame  
plus bele repentance ⁊ ne qui plus dolcement criast merci a nostre  
[M231d] seignor quele fist . Et de sa mort fu lancelet dolans &  
corecies sor tos homes quant il en sor la verite. [p.384.]<sup>4</sup>

知らせを聞いたラーンスロットが、型どおりの嘆きの言葉を2言3言並べた後、その悲しみの様子が簡単に述べられて、それきりである。「流布本」全体を通して描かれてきた大恋愛の結末としては、あまりにあっけないのではないだろうか。しかも、それ以前に王妃の消息を知ろうとする素振りも見られない。何よりもまず、王妃を優先してきた彼らしくない行動である。また、戦が終わりに近づいた頃、一人の裏切り者を追って森に迷い込み、その敵を倒した後も陣に戻らず、ラーンスロットはそのまま隠遁生活に入る。この時になってやっと、王妃の死を悼む様子が描かれるのだが、それもたった一言で済まされており、今まですっかり忘れていたものを、急に思い出したかのような唐突さがある。そして隠遁生活に入ってから後は、王妃について述べられることはない。

隠遁生活に入ったラーンスロットは、神に仕えながら余生を送る。死を迎えるまでの数年の間に、アーサー王やグウィネヴィア王妃の魂のために祈る様子が描かれることはない。彼自身と、彼の親類たちの様子が淡々と綴られていくのみである。勿論、隠修士になるきっかけのひとつは、王妃とリオネル Lionel (ラーンスロットの従兄弟) の死に対する悲しみではある。が、直接の要因は、

最後の戦いによって全てが失われてしまったことに対する絶望感、脱力感であろう。自身が栄華を極めた世界が崩壊してしまった後は、静かに死を待つほかなかったのである。つまり、ランスロットが隠遁生活を送るのは、アーサー王やグウィネヴィア王妃、あるいはガウェインを始め戦で命を落とした円卓の騎士達に対する追悼の念からではなく、また、自分が破滅の原因の一端を担ってしまったことへの罪の意識からではない、ということができる。

晩年病で床に伏し、死期の近いことを悟ると、ランスロットは自分の遺体を「喜びの砦 (la ioieuse garde)」に運び、そこに眠る無二の友ガレオー Galehout の墓の中に、共に葬ってくれるように頼む。そして、それから4日後に天に召されるのだが、その時の情景はいかにもキリスト教的である。木陰で眠っている元カンタベリー大司教が、ランスロットの魂を天使達が天国へ運んでいく夢を見る。寝言で神への感謝と喜びを口にする大司教を、不審に思った同胞が起す。素晴らしい夢を中断された大司教はおおいに残念がるが、その内容からある不安を覚え、同胞と共に急いでランスロットの床を伺いに来ると、すでに彼は天に召された後であった。<sup>\*\*</sup> 静かで平安な死の情景であり、劇的な要素には欠けるといっていい。死を告げる夢、という脚色はあるものの、何か物足りなさを感じる。

私が「英雄の最後」らしくない、といったのはこの点である。「流布本」に見られるランスロットの臨終の場面は、いってみれば聖人のそれであって、非常に模範的な死の形なのである。キリスト教徒の理想的な死の形といってもいい。贖罪行為によって現世での罪を洗い落とし、最後に神の祝福を受けて天に召される。敬虔なキリスト教徒の最後はこうあるべきだ、という考えが見え隠れしていないだろうか。しかも、当時の社会では、森に隠れて修業を積む隠者は、皇帝や教皇でさえ一目置かなければならない、最も理想的な人物像だったのである<sup>5</sup>。模範的な騎士であるランスロットは、最後まで模範的であるべきだったのかもしれない。そういう意味では確かにふさわしい最後ではある。だが英雄としてはどうだろう。偉大な英雄として、ふさわしい最後を迎えているといえるだろうか。これについてはまた後で論じることになろうと思う。

## II

次に、スタンザ形式の『アーサーの死』におけるラーンスロットの臨終の場面を見てみよう。モードレッドとの戦いでアーサー王が斃れ、その知らせを受けてグウィネヴィア王妃が女子修道院に入る、という点は「流布本」に同じである。違うのはその後の展開である。「流布本」で戦を続行したモードレッドの息子達は『アーサーの死』には存在しない。ラーンスロットがブリテンに到着するのを待たずに、反乱軍の総大将であるモードレッドの死によって、戦は終結に向かうのである。ここではラーンスロットは“間に合わなかった英雄”となっている。駆けつけてももはやなすべきことの無い彼のもとに、王妃が5人の侍女を連れて行方を晦ませたという情報が入る。そこでラーンスロットは、彼女の消息を確かめるために一人探索を始め、3日後に、運よく王妃のいる女子修道院に立ち寄り、感動的な再会を果たす。「流布本」ではアーサー王の仇討ちの場面であり、剛胆な騎士としての見せ場だったところが、ロマンティックな、恋人との再会に変わっているのである。

ラーンスロットに気付いた王妃は、ショックで3度気を失う。まわりの者達が王妃を部屋に運び、修道院長とラーンスロットが呼ばれ、やがて王妃は口を開く。

“Abbes, to you I knowlache here  
 That throw thys ylke man And me,  
 For we to-gedyr han loved vs dere,  
 All thys sorowfull werre hathe be;  
 my lord is slayne, that had no pere,  
 And many A doughty knyght And free;  
 There-fore for sorowe I dyed nere,  
 As sone As I euyr hym gan see —

[3638-45]<sup>6</sup>

自分とラーンスロットが愛し合ったために、王国の崩壊を招いてしまった、今はその罪を償い、神の許しを得ることだけが望みだと語った後、グウィネヴィア王妃は、ラーンスロットに国へ帰って妻を娶るように願い、更に続けてこう

言うのである。

Vnto god I pray, All-mygthy kyng,  
    he yeffe yow to-gedyr Ioye And blysse,  
But I be[se]che the in All thyng  
    That newyr in thy lyffe After thysso  
Ne come to me for no sokerynge,  
    Nor send me sond, but dwelle in blysse;  
I pray to god euyr lastyng  
    To Graunte me grace to mend my mysse.” [3670-77]

王妃の言動からは、自分を捜し出した恋人に喜ぶ様子はうかがえない。彼女はただひたすら、自らの犯した罪と、その罪が引き起こした結果におののき、深い悔恨の念に沈んでいる。そして恋人にも、自分への愛を諦めて、別の人生を歩むように求めるのである。「流布本」では客観的状況が最小限の形で語られるのみだったのに比べ、『アーサーの死』でのグウィネヴィア王妃は、堂々とした淑女の威厳を与えられている。一方ランスロットは、どこまでも王妃の恋人として答える。

“Now, swete madame, that wold I not doo,  
    To haue All the world vnto my mede;  
So vntrew fyne ye me neuyr mo;  
    It for to do cryste me for-bede!

．．．  
Vnto god I yiffe a heste to holde,  
    The same desteny that yow is dyghte  
I will Resseyve in som house bolde,  
    To plese here-After god All-myght;

To please god All that I maye

I shall here-After do myne entente,  
And euyr for yow specyAlly pray,  
While god wyll me lyffe lente.”

[3678-93]

自分は国には帰らないし、妻も娶らない、王妃と同じ生活を送り、死ぬまで王妃のために祈りを捧げる。そう誓ったランスロットは、別れ際に王妃に頼む。

“madame,” than sayd launcelot de lake,  
“kysse me, And I shall wende as-tyte.”

[3712-13]

接吻は、貴婦人が恋人に与える愛の印である。貴婦人の意にかなう名誉を得た騎士が、報酬として受ける愛の贈り物のひとつである。つまり、ランスロットはあくまで王妃の恋人たろうとしているのである。だが王妃はそれを拒否する。ここでの両者の意識の差は大きい。王妃にとっては、ランスロットとの恋はすでに終わっており、もはや罪の意識しか感じていない。しかしランスロットにとっては、王妃との恋は永遠不滅なのである。罪(syne)だとは言いながら、そこに甘美な響きを感じているのではないかとさえ思われる。グウィネヴィア王妃の毅然とした態度と、ランスロットの情熱的な態度が対比されることによって、この場面は悲劇性を増し、感動的な情景を作っている。そして2人は互いに辛い気持ちで別れるのであるが、ランスロットが己の罪を本当に自覚するのは、森をさまよった挙げ句、隠者になっているカンタベリーの大司教とベディヴィアに会って、戦の顛末とアーサー王の最後についての話を聞いた時であった。

He threw hys armys to the walle,  
That Ryche were and bryght of blee;  
By-fore the e[r]myte he gan downe falle,  
And comely knelyd vpon hys knee;  
Than he shrove hym of hys synnes Alle  
And prayd he myght hys broder be,  
To serue god in boure and halle,



隠遁生活に入ってから7年後、ランスロットは病に倒れる。「流布本」と同じように、自分が死んだら遺体を「喜びの砦(Ioyes garde)」に運んで、そこに埋葬してくれるように頼む。そして、ランスロットの死の前日に大司教は夢を見る。内容は「流布本」とだいたい同じだが、描写は多少細くなっており、夢を見るのも木陰ではなくベッドの中と、状況も微妙に異なっている。が、天使たちがランスロットを天に運んでいくことに変わりはなく、神に祝福された穏やかな死の情景が描かれている。その死に顔は赤みがさし、まるで眠っているかの様だったと言われている、というくだりなどは聖人の臨終そのものであろう。

「流布本」では、ランスロットが埋葬された後、残った者達がどうしたかについての短いエピソードで物語は終わっている。『アーサーの死』でも、ランスロットの臨終が最後を飾っているといっている。ただ「流布本」と違うのは、ランスロットを「喜びの砦」に埋葬した帰り道、一行がエイムズベリーに立ち寄って、そこでグウィネヴィア王妃が亡くなっているのを見つけるというくだりである。王妃の死に顔も赤みがさしていたとあるから、こうした描写は、神の祝福を得て天に召されたことを示す、当時の常套的な表現であったのかも知れない。大司教達一行は王妃の遺体を運び、アーサー王の傍らに葬る。このくだりはわずか8行の短さである。90行余に渡るランスロットの臨終・埋葬の場面に比べ、非常に簡潔に済まされているのだが、この一節が挿入されているのは、『アーサーの死』が「流布本」と性格を異にしていることの現れなのである。

前にも述べたが、「流布本」は“ランスロット一代記”のような性格を持っている。あくまで中心はランスロットであり、したがって、最後までランスロットで締めくくられている。ところが、『アーサーの死』は、いってみればアーサー、グウィネヴィア、ランスロットの3人が中心であり、特にグウィネヴィア＝ランスロットの2人の関係が重視されている。そのため、例え一言であろうと、グウィネヴィアの最後について触れる必要があったのであり、彼女がランスロットとほぼ時を同じくして死を迎えることで、恋人達のつながりを完結させているとも考えられる。ただ、グウィネヴィアの死がランスロ

ットの死の後に述べられているのは、晩年のラーンスロットが改悛していることも示している。今後一切連絡を取らぬように、という王妃の言いつけを守るだけでなく、ラーンスロット自身も自分の罪を深く悔やんでいて、だからこそ死ぬまで王妃と関わりを持つことはなかったのである。

『アーサーの死』のラーンスロットの最後は、直前に派手な戦闘の場面が無いだけに、静かではあるが、印象的な効果を持っている。しかしそれはやはり聖人としての荘厳さであり、「英雄の最後」として見た場合には、「流布本」と同様、ある種の物足りなさを感じざるを得ない。悔い改めた英雄の姿は、模範的な美しさを持っけてはいても、劇的な、迫力のある何かに欠けているように思われるのである。

### III

サー・トーマス・マロリー Sir Thomas Malory は「フランス流布本」を英語に翻訳する形で「アーサー王物語」を書いた。しかし、彼はただ翻訳するのではなく、より文学的な流れを作ろうといういろいろ手を加えている。「流布本」以外の文献を原典として利用していることもその一つで、その中にスタンザ形式の『アーサーの死』も含まれており、特にラーンスロットの最後の場面では、かなりの割合で『アーサーの死』を参考にしていることが伺える。とはいえ、物語の展開や主題からマロリーが織り込もうとしたものは、「流布本」『アーサーの死』いずれとも異なっている。

最後の戦いでアーサー王が薨れ、その知らせを受けたグウィネヴィア王妃は女子修道院に入る。ラーンスロットは王に加勢しようと海を渡ってくるが遅きに失する。ここまでの展開は『アーサーの死』とあまり変わらないが、この後からマロリーのオリジナリティが発揮されてくる。ブリテンに到着し、もはや全てが終わってしまったと知ったラーンスロットが、まず初めにするのは、親友であり、共にアーサー王の片腕として円卓の騎士団をまとめてきたガウェインの墓を訪れることである。『アーサーの死』ではラーンスロットはすぐにグウィネヴィア王妃を捜しに行ってしまうが、マロリーではまず友の弔いをするのである。1晩と1日をかけてミサを行った後、ラーンスロットは更に2晩をガウ

ェインの墓のそばで過ごす。そして3日目になってやっと、グウィネヴィア王妃を捜しに行くのである。この挿話によって、ラーンスロットが騎士同士の友情を重んじる人物であることが、改めて強調されている。王妃ばかりを最優先しているのではないことをさりげなく匂わせている感があり、ラーンスロットの騎士としての徳を高めるために加えられたエピソードであるとも考えられる。

グウィネヴィア王妃を捜して西に向かったラーンスロットは、7日～8日間さまよった末に、王妃のいる女子修道院にたどり着く。王妃はすぐ彼に気付いて、3度気を失い、侍女達に助け起こされる。意識を取り戻し口がきけるようになると、王妃はラーンスロットを呼んでくれるように頼む。そして彼が呼ばれてくると、一同を前に彼女は告白を始めるのである。

‘Thorow thys same man and me hath all thys warre be wrought, and the deth of the moste nobelest knyghtes of the worlde; for thorow oure love that we have loved togydir ys my moste noble lorde slayne. Therefore, sir Launcelot, wyte thou well I am sette in suche a plyght to gete my soule 「hele」. [p.1252.]’

更に彼女はラーンスロットに告げる。

And there[f]ore, sir Launcelot, I requyre the and beseche the hartily, for all the lo[v]e that ever was betwyxt us, that thou never se me no more in the visayge. And I commaunde the, on Goddis behalff, that thou forsake my company. And to thy kyngedom loke thou turne agayne, and kepe well thy realme frome warre and wrake, for as well as I have loved the heretofore, myne [har]te woll nat serve now to se the; for thorow theand me ys the f[lou]re of kyngis and [knyghtes] destroyed. [p.1252.]

内容的には『アーサーの死』にそった形になっており、ラーンスロットの返事も同様であるが、より情熱的な言葉となっている。

Nay, madame, wyte you well that shall I never do, for I shall never be so false unto you of that I have promysed. But the 「same」 desteny that ye have takyn you to, I woll take me to, for 「to please」 Jesu, and ever for you I caste me specially to pray. . . . f<o>r yet wyste ye me never false of my promyse. And God deffende but that I shulde forsake the worlde as ye have done! . . . And therfore, lady, sythen ye have taken you to perfeccion, I must nedys take me to perfection, of ryght. For I take recorde of God, in you I have had myn erthly joye, and yf I had founden you now so dysposed, I had caste me to have had you into myn owne royame. But sythen I fynde you thus desposed, I ensure you faythfully, I wyl ever take me to penaunce and praye whyle my lyf lasteth, . . . Wherefore, madame, I praye you kysse me, and never no more.

[p.1253.]

(下線は筆者による)

マロリーのラーンスロットが『アーサーの死』のラーンスロットと決定的に違うのは、下線を引いた箇所にも明らかのように、彼が、王妃を捜し出したら自分の国に連れて行くつもりでいた、という点にある。『アーサーの死』のラーンスロットも自分の罪に対する自覚が足りないが、マロリーのラーンスロットはそれに輪をかけて無責任である。「私とこの男が愛し合ったために、大いなる災いを招いてしまったのです」と王妃が告白しているにもかかわらず、脳天気には「私の国にお連れするつもりでした」などと言うことは、彼が王妃の心情を全く理解していないことを示している。王妃がすっかり改悛しているのを見て、自分も神に仕えることにすると誓ってはいるが、それは決して己の罪を自覚したからではない。王妃がそうしているから同じようにする、というだけのことなのである。このため、接吻を求める最後の言葉は、『アーサーの死』よりも、より生々しく響いてくる。

王妃はこれをきっぱりと拒絶し、2人は悲しみのうちに別れる。ラーンスロットは馬を駆り、泣きながら森をさまよって、やがてベディヴィア Bedwere とカ

ンタベリー大司教が隠遁生活を送っている礼拜堂にたどり着く。ベディヴィアから戦の顛末を聞くと、甲冑を投げ捨てて隠修士になる許しを得、そのままそこにとどまって、神に仕える生活を送るようになる。しかし、『アーサーの死』に見られたような、自分の罪に対するおののきや改悛の様子は、マロリーのランスロットには見受けられない。E.ヴィナーヴァ Eugene Vinaverは“*He repents not of the sins he has committed against God, but of the griefs he has caused his lady and King Arthur.*”<sup>6</sup>と述べているが、神に対してだけでなく、自分の主君や仲間に対して犯した罪も、悔やむ様子はないのである。ここでのランスロットは『アーサーの死』より「流布本」の方に近い言動をとる。‘*Alas! Who may truste thys world?*’[p.1254.]と嘆く彼は、改悛のために神に仕えるのではなく、現世への絶望感・脱力感から神の道に入るのである。

ランスロットとその同胞は、6年の間贖罪行為に日々を費やすが、やがて彼は司教職を務めるようになる。驚いたことに、彼は聖職者としての地位を得るのである。「流布本」や『アーサーの死』では、ランスロットは隠修士のまま生涯を終わる。世捨て人のまま、死を迎えるのである。ところが、マロリーのランスロットは聖人として前向きである。外面的なショックはあったが、内面的には余り影響を受けなかった、つまり、彼は自分の属していた世界には絶望したが、自分の価値観自体に虚しさを感じることはなかった、ということを表していると考えられなくもない。しかし、マロリーが彼に聖職者の地位を与えた理由は他にある。

司教職を務めるようになって1年余り経ったある晩、ランスロットの夢に幻影(a vysyon)が現れる。神の使いのようなもので、ランスロットに罪の許しを与えるとともに、急いでエイムズベリーに行くよう命じると、こうつけ加える。

‘And by thenne thou come there, thou shalt fynde quene Guenever dede. And therefore take thy felowes with the, and purvey them of an hors-bere, and fetch the cors of hir, and burye hir by her husbond, the noble kyng Arthur.’ [p.1255.]

この夢のお告げは一夜のうちに3度あり、ランスロットは隠修士に助言を求める。夢に従うべきだということになり、準備を整えてエイムズベリーへと向かうが、厳格な生活を送ってきたためすっかり体力の衰えていた一行は、30マイルちょっとの道のりに2日をかけなくてはならなかった。やっと着いた時には、グウィネヴィア王妃はすでに30分前に息を引き取っており、ランスロットは修道女達から王妃の最後の言葉を聞くことになる。なぜか王妃は、ランスロットが司教職についていることも、自分の遺体を引き取りに来ることも承知していた。そして自分が生きているうちにランスロットに会うことのないよう、神に頼んでいる。

'I beseche Almyghty God that I may never have power to see syr  
Launcelot wyth my worldly eyen!'

[p.1255.]

王妃の死に顔を見たランスロットは、泣き崩れることもなく、ただ溜め息をつく。そして夢の指示通りに、王妃の遺体をグラストンベリーに運び、その晩は多額の献金を伴う埋葬式を行い、翌朝には同様に盛大な葬儀を行ってから、大理石の棺に遺体を納め、夫であるアーサー王の墓の傍らに埋葬する。

つまり、マロリーがランスロットに聖職者としての高い地位を与えたのは、グウィネヴィア王妃の葬儀を、彼女の身分にふさわしい形で行わせるためなのである。ランスロットが清貧のままであったら、埋葬式も葬儀もごく質素なものになってしまうだろう。修道女とはいえ地位は高く、かつては大国の王妃であり最高位の貴婦人だった女性の葬儀としては、やはりある程度の荘厳さがほしい。それに何よりも、人生の全てだった恋人の葬儀をまともにできないのでは、ランスロットの面目が立たないのである。

王妃を埋葬する時、ランスロットは気を失い、助け起こしに来た隠修士に 'Ye be to blame, for ye dysplese God with suche maner of sorow-makyng.' [p.1256] と咎められる。それに対して彼は、自分の悲しみは人間としてあたり前のもので、神はそれを良くご存知であるから、御不興をかうことは無いと信じていると答える。そして彼は王妃と王の墓を目の前にして、初めて自分の罪を懺悔し、それ以後、ほとんど食べ物や口にしなくなり、や

せ衰えて弱っていくが、病に倒れるまでの6週間、ずっとアーサー王とグウィネヴィア王妃の墓のそばを離れなかった。

ヴィナーヴァは、マロリーがこのグウィネヴィア王妃の死の場面を書いたことについて、“when he came to the passage describing how Lancelot ‘sekenyd sely sare’ and died of sickness (ll.3834) he found an opportunity of adding a denouement which brought out once more the human tragedy underlying the death of Arthur theme. Lancelot’s fate was thus linked with Arthur’s”<sup>9</sup>との見解を示している。確かに「流布本」でも『アーサーの死』でも、ランスロットの死とアーサー王の死との関連性は全く無く、別々の出来事として存在している。しかしマロリーでは、ここにグウィネヴィア王妃の死が絡むことによって、2人の英雄の死が引き寄せられており、物語の主題を明らかにし、全体を引き締める効果をもたらしている。

死期が近づくと、ランスロットは司教に、自分の遺体を「喜びの砦 (Joyous Garde)」に運ばせて、そこに埋葬してもらえるように頼む。その晩、司教は天使がランスロットを天へと運んでいき、天国の門が彼に向かって開かれる夢を見て、喜びの声を上げ、他の者達を起こしてしまう。司教から夢の内容を聞いても、ボルス達はランスロットが死ぬとは思えない。それでも司教に言われて彼の様子を見に行き、すでに魂が天に召された後のランスロットがベッドに横たわっているのを見つける。その顔は微笑んでおり、芳しい香りが彼を包んでいた。神に祝福された穏やかな死の情景である。

この後にランスロットの死を悲しむエクター・ド・マリス Ector de Maris の嘆きが続くが、これはマロリーによって加えられたもので、「流布本」『アーサーの死』いずれにも見られない。彼がこの箇所を執筆する際に参考にした可能性があるものとして、頭韻詩の『アーサーの死』[the alliterative *Morte Arthure*]の中で、ガウェインが死んだ時に、フレデリック王とモードレッドが生前の彼を讃える箇所が挙げられているが<sup>10</sup>、参考にしたとしても、マロリーの方がより叙情的なものに仕上がっている。

‘A, Launcelot!’ he sayed, ‘thou were hede of al Crysten knyghtes!  
And now I dare say,’ sayd syr Ector, ‘thou sir Launcelot, there thou  
lyest, that thou were never matched of erthely knyghtes hande. And

thou were the curtest knyght that ever bare shelde! And thou were the truest frende to thy lovar that ever bestrade hors, and thou were the trewest lover, of a synful man, that ever loved woman, and thou were the kyndest man that ever strake wyth swerde. And thou were the godelyest persone that ever cam emonge prees of knyghtes, and thou was the mekest man and the jentyllst that ever ete in halle emonge ladyes, and thou were the sternest knyght to thy mortal foo that ever put spere in the reeste.'

[p.1259.]

この嘆きの一節は、文学的に優れているというだけでなく、別の重要な役割も果たしている。エクターが惜しんでいるラーンスロットは、改悛して神に仕え、断食と祈りの日々を送ってきた聖人ではない。勇敢な騎士の中の騎士であり、また最も忠実で理想的な恋人として、俗世でのあらゆる栄耀栄華を極めた誉高い人物である。勿論エクターは、最後の戦いの後、グウィネヴィア王妃を捜しに行ったまま帰らないラーンスロットを7年の間ずっと捜し続けていたため、隠遁生活を送ったラーンスロットの姿を見てはいない。そのために聖人としてのラーンスロットを讃えることができなかったのだ、と言うこともできるかもしれない。しかし、聖人としての臨終では、どうしてもある種淡白な場面になってしまうところに、騎士としてのラーンスロットへの賛辞を入れ、華やかな頃の彼の姿を再び蘇らせているということは、そうすることで、この偉大な英雄の最後に劇的な効果を与えようとしているのだ、とは考えられないだろうか。

#### IV

叙事詩やロマンスに登場する英雄のうち、死の物語が存在する者達の多くは、悲劇的な死を迎えている。特に、名の知れた偉大な英雄であるほど、その傾向は強いようである。アーサー王文学の中だけで見ても、アーサー王はモードレッドの謀反によって破滅へ向かい、ガウェインはラーンスロットとの戦いで負った傷が元で死ぬことになる。トリストラムは「白い手のイゾルデ」の嫉妬に



よって死を早めるか、マーク王の卑怯な騙し討ちにあって命を落とす。神に祝福された騎士ガラハッドも、神に近づき過ぎたが故に、余りに早い死を迎えるのである。アーサー王文学以外の作品、例えば『ベオウルフ』[*Beowulf*]、『ローランの歌』[*Chanson de Roland*]、『ニーベルンゲンの歌』[*Das Nibelungenlied*]などを見ても、英雄の最後はいずれも悲劇的である。

こうした「英雄の最後」は、叙事詩や武勲詩においてはほとんど必須条件といってもよく、またロマンス作品においてもその伝統が引き継がれることが多かった。時代を経るうちに性格を大きく変えていった英雄も、臨終の場面は原形に近い形を残すことが多い。アーサー王やトリストラムがそうであり、アヴァロンへの船出の場面や、黒い帆と白い帆の場面などは、比較的手を加えられずに継承されてきたといっていいただろう。つまり、起源を古く持つ英雄ほど、悲劇的な死の伝統を残している可能性が高いとも言える。

あるいは、あまりにその英雄が人々から愛されたために、その死が否定されてしまったり、臨終の物語自体が作られなかったりする場合もある。アーサー王の復活伝説は前者の代表で、アヴァロンに（または地下に）眠る王が、ブリテンが危機に瀕した時、眠りから覚め人々を救いに現れる、という伝説は当初から存在している。また後者の例としては、ガウェイン、パーシヴァルを挙げることができる。両者とも一応死のエピソードが存在するが、それは時代をかなり経てからのことであり、しかも必ずしも積極的に取り組まれてはいない。そして、アーサー王ロマンスの寵児、騎士道の花ランスロットは、この後者の部類に属する。ランスロットの臨終の物語も、やはり長い間作られることがなかったが、アーサー王ロマンスの円熟期になって、物語作家達の中の有能な者が“decided to link Lancelot's death-tale with the already famous account of Arthur's death, as told in the chronicles”<sup>11</sup>、そうして「フランス流布本」に見られるような物語が作られたのである。

したがって、ランスロットの臨終は、キリスト教以前の古い民間伝承に起源を持ち、臨終の物語も早くから存在したアーサー王やトリストラムとは、おのずから性格を異にする。しかし、それではガウェインやパーシヴァルと同様かということ、否なのである。

ガウェインは、モードレッド軍との戦いのさなか、先の戦闘でランスロットから受けた傷の上に再度打撃を受けたため、治りきっていなかった傷が開き、

死に至る。英雄としてはそれほど派手な死の場面ではないが、彼は戦場で騎士として、戦士として死ぬのである。また、ガウェインはその死後、アーサー王の夢枕に立ち、王に助言と警告を与えるという、ある種神秘的な役割を担っており、その情景はキリスト教的というよりは、むしろ異教的・ケルト的な雰囲気を作り出している。一方、パーシヴァルの死は、彼に取って代わった聖杯の騎士ガラハッドの死に付随する形で、ごく簡単に述べられるにとどまっている。本来なら、ガラハッドの臨終の場面の荘厳さは、パーシヴァルにこそ相応しいものだったと思われるが、「聖杯の騎士」の称号がガラハッドのものとなってしまったことで、権利を失ってしまったのであろう。

では、ラーンスロットの場合はどうだろうか。これまで述べてきたように、彼の最後は多分にキリスト教的である。断食し、祈りを捧げ、ひたすら神に仕えて余生を送る。その意味では、パーシヴァルあるいはガラハッドの最後と共通しているように見える。ところが、聖杯の騎士達が一貫して神のために人生を送り、栄光の中で神に仕えたのに比べ、ラーンスロットは俗世に絶望した世捨て人として、神に仕えている。神への奉仕は、彼にとっては栄光ではないのである。彼にとっての栄光は、騎士として、宮廷人として名誉を得ることであり、神による祝福は、彼にとっては免罪符でしかない。この“騎士としての名誉に生きる”という点では、ラーンスロットの人生はガウェインに共通しているのだが、ガウェインが死ぬまで騎士として生き、騎士として最後を迎えているのに比べ、ラーンスロットは結局その名誉を捨てて、神に仕えることを選んでいる。彼の最後は聖人のそれだと前に述べたように、ラーンスロットは、死ぬ時は聖職者であり、騎士ではないのである。

「流布本」のラーンスロットは、アーサー王国が崩壊してしまったことへの絶望・脱力感から、スタンザ形式の『アーサーの死』のラーンスロットは、グウィネヴィア王妃と同じ運命を選んで、そしてマロリーのラーンスロットは、王妃への忠誠と王国崩壊への絶望から、それまでに得たすべてを捨てて隠遁生活に入る。理由の違いこそあれ、いずれの作品でも、ラーンスロットは優れた騎士としての栄光を捨て去ってしまっている。そして彼は、世捨て人・聖職者として最後を迎えるのである。人々が熱狂し、寵愛した宮廷風恋愛人ラーンスロットの姿はそこには無く、ただひたすら模範的なキリスト教徒の姿がある。これは、11、12世紀にキリスト教が社会的に影響力を持ってきたことと無縁では

ない。宮廷風恋愛社会における「理想的な騎士」「理想的な恋人」の典型だったランスロットは、中世ヨーロッパでのキリスト教教義の普及にともない、「理想的なキリスト教徒」の典型としての姿を期待されたのである。それは、あくまで「理想」を具現することを求められたランスロットの宿命だったともいえるのではないだろうか。

## 跋

ランスロットは英雄だった。神秘的な生い立ちを持ち、成人してからは円卓の騎士団の頂点を極め、栄耀栄華を欲しいままにした豪傑であった。アーサー王国の発展への貢献は他のどの騎士よりも大きく、その肩に総てがかかっていたといっても過言ではなかった。まさに騎士の中の騎士であり、英雄と呼ぶに相応しい人物であった。しかし、いかに理想的であろうと、人々から尊敬される存在であろうと、世捨て人・聖職者となり、それまでに得た名誉を全て捨てたランスロットは、もはや「英雄」ではない。彼の臨終は「聖人の最後」の典型ではあっても、決して「英雄の最後」ではないのである。マロリーは、ランスロットに最後までアーサー王やグウィネヴィア王妃と関わりを持たせ、またエクター・ド・マリスにランスロットを賛美させることで、「英雄」ランスロットを残そうと試みた。彼はランスロットに「理想的英雄」を求めているのである。しかしその努力は、それ以降、エクターの嘆きが評価されることはあっても、ランスロットの臨終自体はかえって影が薄くなっていることから考えて、必ずしも成功しているとは言えないようである。

1. Derek Brewer, 'The Presentation of the Character of Lancelot : Chretien to Malory', *Arthurian Literature* III, ed. Richard Barber, advisory eds. Tony Hunt and Toshiyuki Takamiya (Cambridge: D. S. Brewer · Barnes & Noble), p.26.
2. *Ibid.*, p.26.
3. H. Oskar Sommer, ed., "La Mort le Roi Artus", vol. VI of *The Vulgate Version of the Arthurian Romances* (New York: AMS Press, 1979), p.379.
4. *Ibid.*
5. See 阿部謹也、『甦える中世ヨーロッパ』(東京：日本エディタースクール出版部、1991), p.140.
6. J. Douglas Bruce, ed., *Le Morte Arthur: A Romance in Stanzas of Eight Lines*, EETS E.S.88 (London: 1903, repr. New York: 1975).
7. Eugene Vinaver, ed., rev. by P. J.C. Field, *The Works of Sir Thomas Malory*, 3rd edition (Oxford: Clarendon Press, 1990), volume III.
8. *Ibid.*, volume I, "Introduction", p.xcix.
9. *Ibid.*, volume III, "Commentary", p.1659.
10. See *ibid.*, volume III, "Commentary", p.1662. <1259. 9-21.>.

頭韻詩の *Morte Arthure* (3872-84) の一節を引用している：

He (=Gawain) was þe sterynneste in stoure that euer stele  
werryde . . .

Mane hardyeste of hande, happyeste in armes . . .  
þe lordlieste of ledyng, qwhylls he lyffe myghte,  
Fore he was lyone allossede in londes inewe;  
Had thow knawen hym, sir kynge, in kythe thare he lengede,  
His konyng, his knyghthode, his kyndly werkes,  
His doying, his doughtynesse, his dedis of armes.'

11. Peter Korrel, *An Arthurian Triangle* (Leiden: E.J. Brill, 1984), p.204.

#### 補 註

- \* この論文では「英雄」という言葉を特に限定して使ってはいない。神話・伝承、叙事詩、年代記、ロマンスなどの中で、大きな功績を上げ、物語の中心的役割を果たしている人物（男性）を、広く指している。したがって、半神の超人も、強大な力を持った大王も、冒険を生業とした騎士も、すべて「英雄」と表現している。
- \*\* この箇所の叙述は「流布本」の全てに残っているわけではなく、おそらくシトー派修道士が書き加えたのだらうと、推測されている。